このまま「紙の本」は消えてしまうのか

「記憶のあやうさ」選手権なるものが開催されようものなら、上位入賞に大いに自信ありです。昨晩の夕食メニューを忘れるなんて当たり前。かつての同僚の名前だって、数億光年の彼方に消え去っています。（申し訳ありませんが）

ところで年のせいでなく、激しく忘れてしまっているのが「漢字」です。これはパソコンの普及が原因だと思われ、漢字が書けなくなってしまっているのは私だけではないでしょう。ヒトの記憶は生命存続に役立つモノのみが長期記憶に送り込まれるので、脳科学的には、漢字などは覚えた先から忘れ去られる運命にあり、仕方ないといえなくもないわけです。ただ、漢字を「手で書く」のと「キーで打つ」のでは記憶の残り方に差が出てしまうのではないでしょうか。小学生の時分から、漢字は書いて覚えなさいと言われてきましたが、あらゆる「技」を職人たちが「手で覚える」のに近いのかも知れません。そう考えると、パソコンの普及で漢字を忘れてしまうのは、現代病の一つといえるでしょう。

パソコンやコンピュータの普及は出版業界にも大きな影響を与えていますが、「電子書籍」の普及で「紙の本」は消えてしまうのでしょうか。かつては、学者や蔵書家の家が本の重みで傾いたという話を聞いたことがありますが、草森伸一氏も「随筆　本が崩れる」（２００５年発刊）に、本の山が崩れ、バスルームに閉じ込められた経験を書き残しています。当時、仕事に使うあてのない3万冊の本を実家に送り、それでも残った本は4万冊に及んでいたとのこと。この草森氏に関して、私が好きな話が「仞蘭　詩人副島種臣の生涯」の執筆エピソード。草森氏は若い頃から副島種臣（明治維新に活躍した人物）に興味を抱き、本や資料を収集し続け、ようやく１９９１年から文芸誌「すばる」で連載開始。2年で完結するとの約束を取りつけていた編集長は、人事異動で一時担当をはずれるも、再び担当に戻って連載を確認したところ、４年も経っているのに、まだ主人公の副島種臣が生まれてもいないのにびっくり仰天したとのこと。

「知の巨人」立花隆氏が１冊の本を書くのに１００冊の本を読んだのは有名な話だが、草森氏は生前刊行された本が４８冊で、没後刊行された本は９冊（２０１０年時点）。先に述べた彼の９万冊の本に見合う刊行数かどうかは分からないが、ともかくこうしたエピソードも部屋のあちらこちらに山積みされた「紙の本」がイメージされるから、おかしみが生まれてくると言えるだろう。

さて、今後学校もデジタル教科書の普及が当然進んでいくだろうが、群馬大学情報学部柴田博仁教授によると、「紙は学校からなくならない」し、「集中力を要する学習の際は紙が有益」だそうです。また、広島大学大学院の難波博孝教授は、「文章に没入し、深く読む読解力の育成には紙の方が適している可能性がある」と言っていますし、同大学の調査では「本を読むなら紙とデジタルのどちらが良いか」という質問に、小学生高学年の八割が紙を選んだとのこと。紙とデジタル。両者をどう併用するかがやはり重要か。

校長も６０歳過ぎれば、役職退職して授業をするようになるケースは少なくない。私も間もなく、そういう立場になるかと思えば、先生方に言うだけでなく、もっと自身もコンピュータを学ばないといけないのですが、つい苦手意識が先走り、秋の夜長に何やら言い訳がましい文章を書いてしまいました。誠に失礼いたしました。

令和５年１０月３日　大 村 城 南 高 等 学 校 長　　中 小 路 尚 也